

「何者」

昭48年卒 経営 浅田 恭正

朝井リョウ氏の小説「何者」の結びの場面で、これまで就活で苦戦をしながらも様々な経験を重ねてきた主人公の拓人が、面接で長所と短所を答えるところがあります。

『「・・・エントリーシートを書いたときとは、変わってしまっているんです けど」

あまり考えることもせず、するりと、言葉が出てくる。

「短所は、カッコ悪いところですよ」

ん、と、女性の面接官の眉間にしわが寄ったのが分かった。だけど、なぜだか、言ってしまうと思った。

「長所は、自分はカッコ悪いということ、認めることができたところですよ」

・・・

たぶん、落ちた。

両膝の上で、ぎゅっと拳を握り締める。

だけど、落ちてても、たぶん、大丈夫だ。不思議と、そう思えた。』

私は、就活を始めようと相談に来た学生に対して、まずやることは「自己分析」だと話しています。自分はいったい「何者」なのかを掘り下げてみることから始めてみようと指導しています。

「過去の自分」「今の自分」「これからの自分」を振り返り、見つめ、そして深く掘り下げてそれらを書いてみることです。

「書く」ことの意味は二つあります。まずは書いてみて顕在化させることによって自分というものを再認識してさらに深く見つめ広げていくことができます。もう一つは書いたものを我々相談員が読んで一緒に自己分析を深めていくことによって、自身で気付いていない「自分」を見つけ、さらに自己理解を広げ、深めていくこととなります。「ジョハリの窓」の「Open Window」を大きくしていくことに繋がるわけです。

さらにはこれからの就職活動において、エントリーシートや面接で必ず聞かれる「学生時代に頑張ったこと」「自己PR」「志望理由」、この三つの質問に対する答えが掘り下げられ、結びついていくこととなります。

この中で特に難しいのが「自己PR」です。ここでアピールするのは自分の持ち味、強みです。企業に対して自らの「売り」は何で、それをどうアピールしていくかが問われ

ているのです。しかし、これからの企業の中での仕事に結び付けて自分の「強み」を見つけ、どのように言語化し、相手にわかってもらえるかはとても難しいことです。それをエントリーシートでは文章で、面接では自分の言葉で表現していくことになります。

学生は自分を見つめるとき、まず目につくのが自分の欠点、弱点です。他の友達や先輩と比較して自分はこんなところが足りない、劣っていると日ごろ感じていることに先に目が向いてしまいがちです。しかし、そんな自分が弱点と思っているところも見方によれば強みにもなるのです。

例えば「頑固」という特性を見た時、この言葉の響きは弱点ととらえられます。しかし一方で「自分の考えをしっかりと持っている」ということも言えるわけです。仕事をしていく上で考える力、つまりは自分の考えを持っていることはとても大切なことです。ですから「頑固さ」も必要な要素なのです。自分の考えを持たない人よりはよほど優れているといえます。一方で企業に入って仕事をしていくとそれまで固執していたその考えも上司、同僚、そしてお客様から鍛えられて幅が広がっていくのです。

事程左様に自分では弱点と思っていた特性も見方によっては強みになりうるということです。

企業の採用、育成の目指すところは同じ強みを持った社員をそろえることではありません。多様な個性と強みを持った社員を擁することが組織としての総合力を発揮し、会社を強くしていくことにつながるわけです。全員、強いリーダーシップを持った社員をそろえても組織としては成り立ちません。企業は社員一人ひとりの個性・持ち味と強みとのベストマッチの中からより良いもの、新しいものが生まれていくのです。

誰でも弱点のない人はいません。その弱みを改善することは大切ですが、もっと大事なことは強みを伸ばすことです。強みを伸ばせば弱みは隠れていき、改善につながり、人間力は大きくなっていきます。

私は学生と一緒に自己分析を掘り下げていく中で、本人自身が気づいていない強み、持ち味を見つめて指摘してあげることがを心がけています。私から「あなたはこのような良いところがある。」と指摘をしてあげると学生の目が輝き、表情がほころび、中には泣き出す子もいます。これまで自分にコンプレックスを感じていた学生も自らの持ち味に気づき、それが強みになると分かり、気持ちを切り替えて、新たな自分を見つめることに繋がっていくのです。

このような学生とのやり取りを重ねていくと、学生は少しずつ自信を持ってきて、面接では自然体で素の自分を語れるようになっていきます。そして、そんな面接を経験していく中で、成長した姿を評価され、認めてもらえる企業にきっと巡り合えると私は思っています。冒頭の「何者」の主人公、拓人のように。